

招魂所とはどんな所か(一)

周辺の地理的歴史的環境について

市野 瀨 仁

(会員・佐伯市長島町)

西南戦争という国内戦争最後の歴史的な戦において、政府軍の戦死者の埋葬地をどうしてこの地に選んだのか、調査して見たい気持ちになった。

臼坪の方々や、佐伯史談会・ライオンズクラブ・佐伯警察署等、毎年招魂所の清掃作業をして、弔ってきたこれ等団体の方々に、私の調査結果を読んで頂ければ、今後には役立つのではなからうかと思つて、発表することとした。

それには明治十年、西南戦争のあつた以前の資料を見ることが一番だと考えて、頭に閃いたのが『御城下分見明細図絵』である。

この図絵は、文政九年(一八二六)毛利藩主十代高翰なかの時代に作られたもので、原図は横三九〇センチ縦三〇〇センチも

ある大きなものを、横五八センチ縦五一センチに縮小したものである。色彩も施されているが、年数が経っていることや、思いきつて縮小しているため、細部はぼやけているのが残念である。

平成七年三月、市は佐伯藩の家老、関谷長熙ひらが御用日記などから重要な記事を選んで、文政三年(一八二〇)藩主に献上した『温故知新録』を一般に公開、活用して郷土史研究に供してもらいたいと、わかりやすく解説して市販した。それに付録として右の図絵がついていたのである。

この文政図絵は『佐伯市指定有形文化財』で、教育委員会が管理している。

(一)位置

城山の東側山裾に養賢寺があり、その背後の山裾にある臼坪集落は、古くから重要な場所となっている。文政図絵では、五所明神から天満社のある間には、五十五軒(五所明神関係の家を除く)の一軒一軒が描かれている。

その西隣の岡と呼ぶ招魂所一帯の地域に、文政図絵を参考にして史跡を图示したものが別図である。

(二)煙硝倉



招魂所周辺地形図

御城下分見明細図絵参照

白坪の前田勇一氏の話によると、明治十九年生まれ
の父から聞いた話に、後山の宝林山からこころ一帯は国有
林であったが、後年払い下げられた。ちょうどここは煙
硝倉(火薬庫)があった所で、基礎石もあったし、瓦・陶
器等が出たものだと言い文政図絵で見ると、白壁の家の
横に槽のようなものが描いてある。

時期は定かでないが、爆発事故があつて以来、再建し
ないままだったと教えてくれたのは、佐伯郷土史の生き
字引きといわれた佐脇貫一氏であった。

年輩の地元の人も、煙硝倉といえはよく知っている。
調査して思うのだが、地元の人と話で共通的な言葉は、
重要な意味を持つていることが多いと思つている。

(三)宝林山泉福寺

招魂所に向かって左
側にわずかばかりの畑
地がある。そこには榎
の木谷から少量の流が
注ぐ。谷川沿いには宝
林山泉福寺と書かれた
建物があり、まだ新し



現在の泉福寺

い。これは墓地建設業者の鶴原正人氏が、昭和六十年に建てたものである。昔の建て物はこの後の一段上にあつた。その証しに小さな池が残っている。

そこから先は山道となる。地元の吉川文雄氏の案内で、高政築城の際、採石場であつたと伝えられる場所を見ることができた。毛利藩ゆかりの地ということがわかる。

ところで、宝林山泉福寺附近の地名は、佐伯市の土地台帳としては、最も古いものと思われる明治時代のものであるが、それには泉福寺と登録されているが、私の調べた資料では、泉福寺という文字に出合わないのである。例えは

御領分中寺社記 土屋亦兵衛(寛政六年一七九四)著

御領分中寺々末庵に

願付養賢寺末庵

一、宝林庵 白坪隠居所

一、地藏堂 大坂本村宇藤木

一、同 同村之内尺間

(以下略)とあり

一方、『佐伯郷土史』(増村隆也著)にも養賢寺乾堂けんどうが、享保十九年(一七三四)二月宝林院に隠居した時は(後略)

とあり、その後誰がどういう形で継いだか杳やまとして不明である。

ところで、『佐伯市史』に次のような記事が見られる。福泉寺ふくせんじ、蒲江町畑野浦は、旧上入津村畑野浦にある養賢寺末の禪寺である。(中略)天和年間(一六八一—一六八三)には養賢寺六世の蛮獄座元がこの寺の住職であつた、と。天和年間といえは五代高久の時で、次が弟の六代高慶となる。泉福寺の名もこうした関係から生まれたかもしれない。

仏教に関心の篤かつた高慶が乾堂を抜擢して、名僧にふさわしい三十三年間の業績に対し、隠居所を作つた。

兄高久当時、養賢寺の住職蛮獄座元のいた寺を福泉寺という。そうした良い名を借りて泉福寺としたと解釈してもよし、後世の誰かがこうした意味をふくんで便宜上命名して、登記簿にのせたと解釈してもよいのではないか。確かな記録が出ればそれにこしたことはない。ついでに、宝林庵の由来はここで確かめておかねばなるまい。

増村隆也著『佐伯郷土史』の中に、僧乾堂は養賢寺九世の住持で、仏教の經典に広く通じ、戒律を守ることまた端正であつた。初め仁田原の正定寺の住持であつたが、

六代高慶はその学識人格共に優れていることを知ると、

養賢寺八世の没後抜擢して、元禄十五年(一七〇二)六月、養賢寺住持として深く乾堂に帰依し、乾堂が經典を講ずる時は、高慶は必ずこれに臨み、聴聞するのが常であった。ために一時衰微した仏教は、再び興隆するに至った。

宝永四年(一七〇七)四月乾堂が円覚教を講じた時、遠近の僧侶は勿論、家中を挙げてこれに臨み、藩はこれに對し白銀百兩、米二十俵を寄進した程であった。(中略)

乾堂は養賢寺の住持たること三十三年、享保十九年(一七三四)二月老いて宝林庵に隠居したが、藩主高慶は毎年米二十俵を贈り老いを養わしめた。この名僧知識も寛保二年(一七四二)十二月卒し、養賢寺裏の歴代住持の墓地に葬られた。青い自然石の墓が乾堂の墓である。と書いている。

問題の宝林山泉福寺という山号は、乾堂が以前いた直川村仁田原の、宝林山正定寺の山号と同じである。白坪の人達が、後山を宝林さんと呼ぶようになったのは、実はここ宝林庵から広がった名称で、歴史の面白さ言葉の転化で、なごやかささえ感ずるのである。ともあれ、ここに霊地としての庵ができたこととなる。

高瀬家・今泉元甫の墓地

日田市の郷土史家、長順一郎氏著の『豊後日田郡―中世村落と武士団』の中に、毛利高政の佐伯転封の折り、八奉行のうち次の三奉行が高政に任せ、士分になったと次のように書いている。

(一)坂本伯耆守鑑次(城下東町坂本格氏の先祖)

一族は日田最古の開拓領主で、中世絶大な勢力を持っていたと思われる。八奉行の筆頭であり、天正十七年(一五八九)太閤検地でも他を遙かに離して、最高の所領を持ち名前も第一番に出ている。一族も多く日田地方に広く点在する。

右は羽野鑑房らと共に、毛利高政に従い佐伯に行き、武士として活躍する。子孫も佐伯城下に健在である。

(二)羽野遠江守鑑房

毛利高政に従って佐伯に行き、百三十石前後の俸禄で仕えた。その後も士分として明治に入り、昭和の頃には佐伯から姿を消している。

(三)高瀬山城守鑑俊(城下東町高瀬統治氏の先祖)

上古より日田家臣也。武勇たくましく技芸に達し、し

かも知恵深い人物であった。

右は毛利高政の佐伯転封の折り、坂本・羽野と共に
仕え、士分として明治を迎えた。

以上のように記されているが、『佐伯市史』では坂本
永慶・梶西小庵・羽野庄右衛門・高瀬仙九郎等陪從して
佐伯に入る。(鶴藩略史)とある。

一体どちらが真実であるのか、確かめてみよう。そこ
で、坂本家と高瀬家、両家の家系譜を見せて貰った。坂
本家の『坂本家系譜』によれば

日田遂 義鑑 後置八郡司 分治日田 坂本伯耆守鑑
次郎其一人也 坂本氏之祖也 其後有小左衛門永慶
者慶長六年從藩主養賢來於佐伯 とあり、
同じく『高瀬家系譜并勤仕録』によれば

高瀬山城守鑑俊同郡高瀬村知行ス、其後義統公ヨリ大
膳亮江統ノ給一字我家之通名也(中略) 高政公君同
国佐伯御所替御扶祿之後大膳亮之次男仙九郎毛利家ノ
臣ト成り当家為元祖(後略)とある。

以上の如く坂本伯耆守鑑次も、高瀬山城守鑑俊も中世
大友時代の人達で、近世初期の毛利高政入封時に、その
子孫の坂本永慶と高瀬仙九郎を連れて来たということか

ら、『佐伯市史』の記録が正しいことになる。両家とも
中世以来、日田地方での名門であった武人達が、未だ城
を持たない佐伯の地に、城主高政を頼りに入部したとい
うことは、主従の信頼感が余程大きかったのであろう。

別図にあるように岡の谷の外れの中野に近い山手に、
高瀬家の先祖を葬ったのは、二代目高瀬孫右衛門の寛文
十年(一六七〇)までの家族で、以降は養賢寺の裏山にあ
る。この地は高政没して十三年後つまり毛利藩の初めの
頃、高政の息のかかった家系の墓地として、指定された
ところの意味がある。と共にこの附近が霊地としての魁
となつたところに、歴史的な意味があると思いたい。

以上のほか武人と共に佐伯に来た日田の人達がいた。



高瀬家墓地

今泉元甫の先祖もその
一家である。初代の墓
は寛文元年(一六六一)
八月とある。

今泉元甫は八代高標
に仕えた侍医であった。
元甫は天明・寛政の飢
饉に米百五十石を献じ



今泉元甫墓(前)と墓碑(後)

たり、城山の麓に安井・呷泉・甘泉と三つの井戸を掘って庶民を救った、名実共に誉れ高い名医であった。

元甫の墓は小さく前面に、「山水楽寿庵先生之墓」とあり、その

後に高さ約一三〇センチ、幅約三〇センチの墓碑銘が立っている。

元甫先生の後継者(元甫夫人の弟)簡氏の誌した碑文と、小倉儒宮石川剛先生の碑銘が刻まれている。

今泉家の墓地は高瀬家とほぼ同時代から始まり、高瀬家墓地の隣にあつて、境界は縦約六トメ横四トメの長方形を石組みで囲み、墓数の多さとその広さは一番である。墓の大きさと石質は庶民的で普通であるが、一隅に花崗石の五輪塔が建っている。

高瀬家の墓は代々花崗石で造られたものが列をなし、高級武士の威厳を漂わせているのとは対照的である。

この外江戸前期(享保の時代十八世紀中頃まで)のもので、山内家と甲斐家の墓がある。察するに明治初期頃ま

では、以上記した家の墓がここ岡の谷にのみあつたようである。

まとめ

向かつて左方の中野の山林から、右方の白坪の天満社(八代高標建立)の森に至る間と、中央の招魂所から傾斜をもった土地は、梯形の地形をなしている。左方はやや影地で静寂な所であるが、右方は陽の当たる開放的な所となっている。いつの頃からかともに畑や水田があつた。大字(旧称)白坪の唯一の水田地域でもあつた。この範囲を大字(旧称)岡と言ひ、岡の谷・泉福寺・番所面等の小字地名がある。

十七世紀、徳川家光(三代)の頃、毛利藩では高尙(三代)の時代、高瀬家・今泉元甫の先祖の墓地が中野の山林近くに祀られた。

十八世紀、徳川吉宗(八代)の頃、毛利藩では中興の名君六代高慶が、養賢寺の名僧乾堂(九代)の隠居所を建て、勞をねぎらつて庵となし、泉福寺の地名を残している。招魂所の左方榎ノ谷の流れを聞く雅趣のある場所である。

明治初年土地台帳の作成に当たり、宝林山「泉福寺」を地名として残している。

十九世紀、西南戦争の前年(明治九年)十二代高謙あきが没し、十三代高範のり幼少の頃、官軍の戦没者を葬るため、丘の中央にある一本の楠を神木として、それに向かって田畑の中に参道をぬいた。

近世になって、国の戦没者の墓地として定着した。こうして二十世紀には市民の墓地公園としてふさわしい時代を迎えた。



招魂所全景(中央林の中)

ところが、二十一世紀には、市街地を通る国道二一七号線の交通渋滞解消のため、バイパスが招魂所のすぐ上を通る計画となっている。全く予想外というほかはない。こうして時の流れにのり、地形と人間の織り成す営みによって、歴史は作られて行く。

次の原稿締切り 4 月末日です

原稿をお待ちしています。

送り先

